

幸福の科学の研究

沼田 健哉

1. はじめに

現在、大きな書店では、従来の宗教書のコーナーに加えて、精神世界のコーナーが設置されている場合が多い。本の売り上げ額も、従来の宗教書を上回る勢いだというのが、そのなかでも、最も販売部数、著作点数が多いのが、大川隆法の著書なのである。大川の著書の過半数は、霊界の高級霊との交流による「霊言集」や「霊示集」であるのが特色であるが、一方大川個人による理論書も数多く出版され全部で90冊を超えている。

大川の執筆の速度は、過去のいかなる著者のペースをも上回っているともいわれているが、同時に現在、大川が主宰となっている「幸福の科学」という宗教団体は、急激な会員増加の過程にあり、最近、マスコミにも度々とりあげられている。

以下、当論文においては、大川隆法と幸福の科学について分析を試みるが、それに際し、カリスマとシャーマニズムに関し、若干言及することにした。

カリスマとは、非日常的なものとみなされたある人物の資質であり、「この資質の故に、彼は、超自然的または少なくとも特殊非日常的な、誰でもがもちうるとはいえないような力や性質に恵まれていると評価され、あるいは神から遣わされたものとして、あるいは模範的として、またそれ故に『指導者』として評価されることになる¹⁾。」

1) マックス・ウェーバー 世良晃志郎訳『支配の諸類型』創文社、1978年70頁。

カリスマは、被支配者の意識の内部的変化からその革命的力を示し、その最高の現象形態において、規則や伝統一般を破砕する。カリスマは価値中立的な関係概念であり、現代においては、その衰退と製造・演出される側面を指摘されることも多い。

さらに、カリスマの主たる担い手である教祖という概念は、島園進により、「一つの宗教伝統の創始者」と定義されているが²⁾、西欧においては、一神教であるキリスト教の下にあるため、ふつうの人間が宗教を創始するという観念が生じにくく、教祖の多様性が見落とされがちである。

そのためもあってか、ウェーバーにおいては、教祖に相当する存在はすべて預言者の範疇にくくられている。ウェーバーは、預言者を、「みずからの使命によってある宗教的な教説ないしは神命を告知するところの、もっぱら個人的なカリスマの所有者」³⁾と定義し、以下のように述べている。

「かかる預言者が、ある（実在の、または架空の）古い啓示を今いちど新たに告知するのか、それとも実際に新しい啓示をもたらそうとするのかという点では、いいかえれば、彼が『宗教革新者』として現われるのか、それとも『宗教創始者』として現われるのかという点に関しては、いかなる原理的な区別もしないで置きたい。両者は互いに他方に移行することがありうるし、とりわけ、彼の告知から一つの新しい共同体が成立するにいたるかどうかという点は、預言者自身の意図いかんによることではないからである」³⁾。

ついで、シャーマニズムは、佐々木宏幹により以下のように定義されている。「通常トランスのような異常心理状態において、超自然的な存在（神・精霊・死霊など）と直接接触交流し、この過程で予言・託宣・ト占・治病行為などの役割を果たす人物（シャーマン）を中心とする呪術—宗教的形態」⁴⁾

そして、トランス (trance) は、エクスタシー (ecstasy) = 脱魂 (魂の旅

2) 宗教社会学研究会編『教祖とその周辺』雄山閣出版、1987年11頁。

3) マックス・ウェーバー武藤一雄他訳『宗教社会学』創文社1976年、64頁。

4) 佐々木宏幹『シャーマニズム——エクスタシーと憑霊の文化』中公新書1980年41頁。

行)とポゼッション (possession) = 憑霊 (霊の憑依) に区分される。日本では、圧倒的に憑霊型シャーマンが多く、憑霊の複数の型が提示されている。

以下、当論文においては、まず幸福の科学の歴史について言及し、ついで教義、組織と活動について述べ、最後に大川隆法ならびに幸福の科学の位置づけを試みることにする。

2. 幸福の科学の歴史

幸福の科学の主宰・大川隆法 (本名中川隆) は、昭和31年7月7日、父中川忠義、母君子の次男として、徳島県^{おえ}麻植郡川島町大字桑村834-1に生まれた。昭和44年、川島小学校を卒業後、川島中学校に入学、生徒会長、テニス部主将を経験し、昭和47年、卒業した後、同年、徳島県立城南高校に入学した。同校を優秀な成績で卒業し、一浪の後、昭和51年東京大学文科一類に入学し、昭和53年、法学部に進学した。

当初、政治コースに入ったが、各種国家試験のことを考えて私法コースに鞍替えを考え、法律学に没頭した。そして、私法コース・政治コースの双方の単位を修得し、結局昭和56年、政治コースで東京大学法学部を卒業した。

以上が、大川の学歴であるが、父の善川三郎 (中川忠義) は、大正10年11月20日、徳島県麻植郡川島町に生まれ、青年師範を卒業した後、青年学校国語科教師を振り出しに徳島県で共産党幹部、党機関紙編集長などを経て、四国製針株式会社を設立し、社長となった。その後、結核の大病で倒れ、一年間療養生活を送った後、徳島県庁畜産課分室に勤務した。畜産コンサルタントとして、県下の農業指導にあたりるとともに、各種論文を発表し朝のラジオの農業番組で全国放送による指導も行なった。次長職を最後に退職し、幸福の科学顧問に就任した。

なお、母は、昭和7年11月21日生まれで理容大学修了後、管理理容師をしてきた。大川の兄、富山誠 (本名、中川力) は、昭和27年8月20日生まれで、城南高校卒業後、昭和46年、京都大学文学部哲学科に入学したが、在学中に、

若年性高血圧のため病気がちとなり留年し、昭和53年、哲学科を卒業した。その後、仏教研究のため、種智院大学に学士入学し、卒業。大手進学予備校で受験指導にあたるかたわら、哲学・宗教学の研究を続けた。その後、郷里徳島に帰り、進学塾「太陽学園」を開き、校長となるに至った。

大川は、10歳の時に平凡性を自覚したと記しているが、そのころまでは優秀な生徒ではなく、いわゆるおくての子供であったようである。そのころ、大川は、二つの事を夢見ていたが、その第一は、将来学者になって、自分自身の考えを世に問うことであり、第二は、外交官になって、いろいろな国の人たちと付き合いながら、人間としての幅を広げていくということであった。

小学校、三、四年頃から、ぼちぼち勉強ができるようになった大川に対し、四歳年上の兄は、幼稚園の頃から大変な秀才であった。そうした中において彼は、「自分は平凡である。自分は頭がそれほどよくない。頭がよくなくても、しかし人が一時間やったことを自分が三時間、四時間すれば、なんとか追いついていけるのではないか。人が一年で飽きてしまうようなことを四年、五年続ければ、きつものになるのではないか。……蓄積ということ、継続ということにおいて努力していけば、やがてある時点で化学変化でも起きるように、大いなる飛躍を経験することもあるのではないか」⁵⁾ と思ったという。

小学校の五年・六年になって、ようやくクラスで一番がとれるようになった大川に対して父は、「どんな田舎の学校であっても、どんな小さな学校であっても、一番だけは違うよ。……どんな狭い地域社会においても、一番だけは値打ちがあるかもしれないよ」⁶⁾ と励ましたという。それから、大川は、どんな小さな場においても、その中で非凡な光を発しているということは、思いもかけぬような価値を持っているかもしれないという教訓を学んだ。

大川は、幼い頃から父から大きな影響を受けてきたと記している。父は、深くものごとを考え、読み込む人間であり、大変記憶力がよかった。大川は、

5) 大川隆法『平凡からの出発』土屋書店1989年18～19頁。

6) 『同書』19～20頁。

この父から、9歳、10歳の頃『聖書』や、禅の『無門関』の講義を家庭教育で受けていた。

父は、十代の後半には、矢内原忠雄門下の無教会派で学んだ後、「生長の家」にも入って、唯神実相哲学の勉強をもしており、谷口雅春からも教えを受けたようである。それにもかかわらず、政治活動としては、共産主義活動もやっていた。

そうした父の影響もあり、大川は小学校時代から唯物論の中味を知っており、『共産党宣言』の内容なども聴いていた。さらに、カントの観念論哲学も、小学校時代に父から聴いて知っていた。このようにして、現在の大川の思想の淵源にあるものの多くは、9、10、11歳の頃にだいたい学んでいたという。

東京大学時代、大川は、全国から集まった秀才の中で劣等感の虜になり、やがて対人恐怖ともなって、下宿にこもり、本ばかり読むようになった。大学二年の冬から、翌年の夏まで、都会育ちの女性に恋したが、内気な性格もあって、失恋に終わった。失意の中で、本を読み続けたのであるが、司法試験、国家上級公務員試験のいずれも不合格となり、東大に助手として残ることもできなかった。そのため、結局、昭和56年、総合商社トーメンに入社することになった。

大川は、東京本社配属となり、財務本部外国為替部輸出外国為替課に務めた。昭和57年8月には、財務本部ニューヨーク研修生として派遣され、ベルリッツ・ニューヨーク校を卒業し、ニューヨーク大学で国際金融論を専攻した。

昭和58年8月には、財務本部財務部資金課配属となり、20行ほどの銀行との交渉担当を命じられた。昭和59年3月には、名古屋支社経理部資金為替課配属となり、昭和61年4月には、東京本社、国際金融部輸入外国為替課配属となったが、同年61年7月、トーメンを退職した。

大川は、24歳の冬、GLAの二代教祖、高橋佳子著の『真・創世記 地獄

編』『天上編』などを読み、それを通して、さらにG L A初代教祖・高橋信次著の『心の発見』と出会った。昭和56年1月、『心の発見・神理篇』を読みはじめて、57ページぐらいに達したときに、大川は、自分の胸が大きく打ちはじめ、体が、こきざみに前後に揺れていることに気づいた。

大川は、信次の作品をつぎつぎと読んでいったが、その時、「私は、この神理を知っている。むかし、これを学んだことがある」ということばが出てきたという。

同年の3月23日の午後、内から何とも言えない暖かい感じが込み上げてきて、何かを何者かが大川に伝えようとしているという感覚に打たれた。それで、何か書くものを探して、机の横にあったカード用紙を手にとって目の前に置いた。すると、鉛筆をもつ大川の手が、まるで他人の手でもあるかのように動き始め、カードの中に、「イイシラセ、イイシラセ」と何枚も書きはじめた。そして、「おまえは、なにものか」とたずねると、「ニコウ」と署名した。この最初の霊人は、日蓮聖人の高僧の一人、日興上人だったのである⁷⁾。

一週間か10日もすると、日興上人からの通信は終わり、日蓮聖人からの通信が始まった。しかし、最初は、自分の本名を名のらなかった。やがて、日蓮聖人は、大川と毎日、話をするようになってきた。昭和56年3月から7月の初め頃までは、自動書記という形態をとった。しかし、その後、自動書記で通信を送っていた霊たちが、大川の声・声帯を通して語ることができることが分かってき、自問自答の霊問答が始まっていった。

そして、日蓮聖人を通して話をするうちに、大川の父である善川三郎が、過去に日蓮の最愛の弟子として出たということがひとつの縁となって、日蓮聖人が出たということが分かった。日蓮聖人は、大川に、ある時は自動書記で、ある時は霊言という形でさまざまなことを教えた。そして、大川の「私の使命はどこにあるのか。一体どういう使命を持っているのか。」という問

7) 『同書』167～168頁。

いに対しては、「人を愛し、人を生かし、人を許せ」という言葉が与えられた。さらに、「人を信じ・世を信じ・神を信じよ」という言葉も示され、この二つの言葉は、その後の大川に大きな影響を与えた。

そして、昭和56年6月のある夜、荘厳な声が大川の心に響いてき、高橋信次が大川に通信を開始した。

高橋「大川隆法よ。今日、私は、おまえの使命をあかすために来た。おまえは今後、おおいなる救世の法を説いて、人類を救わねばならないのだ。」

大川「先生、私は一介の商社マンです。しかも、かけ出しの新入社員です。この私などに、なにができません。それとも、お嬢さんがついておられる、GLAという団体の協力でもせよとおっしゃるのですか」

高橋「GLAは、おまえを必要としない。おまえは、おまえの道を切り拓け。独力で自分の道を切り拓いてゆけ」⁸⁾

これらの過程において、父が郷里からかけつけてきた。その父の前で、大川を通してイエス・キリストが出現し、さらには天上界の多くの霊が出て来はじめた。それらの中で、高級指導霊としては、以下の名があげられる。

女性指導霊——出口ナオ・中山みき・小桜姫・聖観世音菩薩・聖母マリア・天照大神

男性指導霊——浅野和三郎、モーリス・バーバネル、シルバー・バーチ、ルノアール、トルストイ、ペテロ（矢内原忠雄）、内村鑑三、不空三蔵、出口王仁三郎、日持、日蓮、空海、マホメット、アインシュタイン、エリヤ、エレミヤ、レオナルド・ダ・ビンチ（ガブリエル）、天之常立之神、谷口雅春（伊弉諾之尊^{いざなぎ}）、天之御中主之神、高橋信次、イエス・キリスト、釈迦牟尼⁹⁾

一方、地位への欲望や、異性への欲望が心を波打たせた時、ルシファー、ベルゼベフ等の悪魔も大川の前に現われてき、心を苦しめた。これらの悪魔

8) 大川隆法『太陽の法』土屋書店、1989年246～247頁。

9) 3周年記念誌編集委員会編『幸福の科学3周年記念誌』幸福の科学総合本部1990年、39～40頁。

との対決を通して、数年にわたる厳しい魂修行の日々が送られた。しかし、ことの重大さをかんがみて、前記の霊が、ほんとうに高級霊であることが確信できるまで、約4年間の沈黙をまもった。

昭和60年8月、善川の編纂による『日蓮聖人の霊言』が潮文社から出版された。同年10月に、『空海の霊言』、12月、『キリストの霊言』、昭和61年2月、『天照大神の霊言』とつづいたが、いずれも好評であった。

これらの霊言集を刊行しながら、大川の会社勤務はつづいたのであるが、昭和61年6月、日蓮聖人、イエス・キリスト、天之御中主之命、天照大神、モーゼ、高橋信次と、つぎつぎに降下した霊たちは、大川に、即座に会社を辞めるようきびしい姿勢で通告してきた。

三日間、眠られぬ夜がつづいた後、結局、大川は、会社に辞表を提出し、7月15日、商社を去ったのである。

そして、同年、10月6日、杉並区西荻南に、もとGLAの会員であった原久子の二階を事務所として、「幸福の科学」が開設された¹⁰⁾。同年、11月23日、幸福の科学発足記念座談会が、日暮里酒販会館で行なわれ、百人近くの人が集まった。

昭和62年には、発足記念講演会が牛込公会堂で行なわれ、大川の講演「幸福の原理」は、主として天之御中主之神の霊指導を受けながら行なわれたが、多くの驚くべき事象が生じたという。同年、5月2日～5日に、滋賀の琵琶湖健康療養センターにて、研修が行なわれた。同年、6月13日、杉並区松庵へ事務所が移転し、「幸福の科学東京本部」と命名された。同年、8月9日、初級セミナーが行なわれ、9月13日、中級セミナーが行なわれた。11月8日には、上級セミナーが行なわれ、12月20日には、関西支部が発足し、12月24日、幸福の科学出版株式会社が設立された。昭和62年末現在の、書籍等発行点数は44点で、会員数は1700名である。

昭和63年3月には、幸福喫茶がオープンした。同年4月10日、主宰大川は、

10) 以下の論述は主として『同書』による。

会員である木村恭子と結婚した。彼女は、昭和40年8月22日、秋田県由利郡矢島町に、開業医（産婦人科・内科・外科）木村正夫と弘子の子として生まれ、東京大学文学部英米文学科卒業後、幸福の科学に関係していた。

同年、4月16日、東京本部が日伸西荻プラザへ事務所を移転し、「幸福の科学総合本部」と改名した。同年7月23日、関東支部が発足し、9月、幸福の科学道場が開設された。昭和63年度末現在の書籍等発行点数は103点で、会員数は4000名である。

平成元年1月29日、中国支部が設立され、2月11日、四国支部が設立された。同年2月24日、主宰夫婦に長男宏洋が生まれ、3月19日には、九州支部が発立された。同年、4月1日、誌友会員制度が開始され、さらに、壮年部・婦人部・青年部を活動推進局の下に設置した。

同年11月26日、第一回全国統一神理学検定試験が行なわれ、12月17日、第九回大川先生講演会が両国国枝館にて行なわれた。12月20日には、総合本部が千代田区紀尾井町ビルへと移転し、翌日、研修局が開設された。平成元年度末、書籍等発行点数は196点、会員数は、正会員8100名、誌友会員、5200名、総計13300名である。

平成2年は、サンライズ90のスタートの年とされ、信仰と伝道の年とされている。1月9日の、主宰の年頭の言葉においては、90年の活動理念として、①5万人の幸福の生産者、②1500万本の花束、③宗教法人化が示され、教勢拡大の年として位置づけられた。活発な活動が展開され現在に至っており、急速な会員増加の過程にある。なお、幸福の生産者とは会員のことであり花束とは書籍をさしている。

3. 幸福の科学の教義

大川は、まずそのコスモロジーの展開において四百億年前に、ビッグ・バンが起こり、三次元宇宙空間が成立したとする¹¹⁾。銀河系の中では、太陽系

11) 当章の以下の論述は、大川隆法の諸著書、とくに『太陽の法』『黄金の法』『永↗

が約百億年前に出現し、70億年前には水星が、60億年前には金星が、そして45億年前には地球が誕生した。太陽系の最初の生命は、55億年前、金星において誕生した最初の九次元神霊で、エル・ミオーレといった。彼は、金星人を何百万体もつくったが、成功せず、いまから15億年前にほとんど死にたえてしまった。

それで、地球の十次元意識である、大日意識・月意識・地球意識の三神霊は、地球での生命活動に二本の柱をもうけることにした。第一は、地上にあらわれた生命の発現レベルに上下の差、高低の差をもたせる。第二は、地上での生命活動は有限とし、多次元世界との転生輪廻を法則とする。

そして、いまから六億年ほど前に、地球惑星神霊たちは、地球に、高級生命を創造しようとし、九次元霊界をつくり、金星からエル・ミオーレを招いた。さらに、いまから約4億年前、地上に人類を誕生させるために、ほかの星から、九次元神霊の応援を求めることになった。こうして、射手座からアモール、蟹座からモーリヤ、白鳥座からはセラビムが呼ばれた。

エル・ミオーレは、このころ、「うるわしき光の国、地球」という意味のエル・カンターレに名前を代えた。彼は、後にゴータマ・ブッダとなり、アモールはイエス・キリストに、モーリヤはモーゼに、セラビムは孔子となった存在である。

これらの四柱は、いまから3億6千5百万年前に、高度に発達した地球霊団をつくるために、進化の進んだほかの星から、地球に適した人霊たちを呼び寄せることにした。こうして、マゼラン星雲のなかのベータ星という星から、アール・エル・ランティという指導者に導かれて、約6千万人の人間が、宇宙船にのって地球にやってきた。その最初の着陸の地となったのが、エジプトであり、ユートピアが建設され、エデンの園の伝説のもととなった。その後、地球は急速な進歩、発展をみるが、やがて、エル・ランティも肉体を

『遠の法』の三部作、ならびに、大川隆法監修『神理用語の基礎知識100』幸福の科学出版1990年による。

去り、五番目の九次元神霊となった。

そして、いまから三億数千万年前には、地球霊界も、九次元・八次元・七次元・六次元までが完成し、残りの部分が低位霊界であった。しかし、二億七千万年前に、オリオン星座から十億人が地球に飛来して来た。この時、九次元神霊として、アケメーネ・オルゴン・カイトロンの三体がやってきた。アケメーネは、後にマヌ・オルゴンは、マイトレーヤ如来、カイトロンは、神智学におけるクート・フーミー、もしくはアルキメデス・ニュートンと呼ばれた存在である。これを、機会に、地球五次元霊界がつくられた。

さらに、一億三千万年前には、ペガサスという星座から、約20億人が飛来してき、この時、セオリヤとサマトリヤがやって来た。セオリヤは、後にゼウスとなり、サマトリヤは、ゾロアスターあるいはマニと呼ばれた。こうして、九次元に十人がつどい、四次元幽界もできていった。

さらに、一億三千万年ほど前に、エル・ランティの考えにより、パイトロソという巨大な装置がつくられ、それにより五人の分身を誕生させた。しかし、分身のなかに、霊格の低い者が多く、それらが、死後、四次元霊界にグループをつくりはじめ、地獄界を形成したのである。そのため、一億二千万年前よりこの方、光の天使と地獄の悪霊たちとの抗争が続いているのである。大川の「太陽の法」とは、エデンの園を取り戻すための、救世の法なのだという。

人類三億年の歴史のなかの、百万年の歴史をひもといてみると、まずゴンドアナ文明があげられる。この文明は、超能力を中心とした文明であり、76万年前ごろから、大陸消滅までの約二万五千年のあいだ盛えた。

ついで、いまから、30万年前から15万3千年前ごろまで栄えたのがミュートラム文明である。この文明では、食生活文明が発達し、食生活と人間の精神生活との関連が、徹底的に追求された。しかし、霊的なるものを軽視する考えが基調をしめ、魂の研究や、魂の修行がおろそかにされてしまった。

ミュートラム文明が、地軸の変化により、滅びた後、いまから八万六千年

前、巨大大陸レムリヤが浮上した。この地に、後にギリシャに生まれて、ゼウスと呼ばれた人が出現しエレマリアと呼ばれた。大聖エレマリアにより、レムリヤ文明は、芸術面において非常に栄えた。その後、いまから二万九千年前に、マヌがマルガリットという名で生まれ、芸術に競争原理をもち込んだ。

レムリヤ大陸が沈んだ後、その植民地であったモア大陸、後の名をムー大陸といった大陸に、約二万年前、ゾロアスターの前身が出、エスカレントと呼ばれた。大聖エスカレントは、太陽の科学的なエネルギーを重視し、太陽の光のパワーに、二種類の意味づけをした。

ムー大陸は、いまからおよそ一万七千年近く前、ラ・ムーの時代に最盛期を迎えた。この時代には、宗教と政治が分離されることなく、最高の宗教は、最高の政治でもあった。しかし、ラ・ムーが没し、その妻が統治するようになって、ムー大陸も衰えていき、大陸の沈下によって、海中に没した。

ついで、アトランティス文明とは、現代文明の直前の文明であり、一万六千年前ごろに文明のきざしが見えて来た。このころ、クート・フーミーが生まれ、生命エネルギーの本質を発見し、その変換パワーの抽出に成功した。アトランティスは、いまから一万二千年ほど前に、科学万能の時代に入って、一万一千年ほど前に沈没し始めた。そして、一万四百年前に、アガシャーが生まれ、愛を中心とした教えを説いた。

この文明も、ある日突然、大陸の沈没により終焉を告げ、その後、文明は、さまざまな形で全地球上へとひろがっていった。

ここ百万年の文明史をみると、以下の五つの共通点がある。1. 文明には、必ず栄枯盛衰がある。2. 神は、必ず各文明に、偉大な光の大指導霊を出した。3. 文明が最盛期を迎え、最後の光が輝いているころ、大異変が必ず起きている。4. 新しい文明は、古い文明の流れを受けつぎながらも、必ず異なった価値尺度を求める。5. しかし、どのような文明であろうとも、人間が魂の修行のために転生輪廻の過程で必要な修行の場であったという事実

かわりはない。

これらを見ると、現代文明は、一つの終末期をむかえつつある。そして、大川は、自分が説く「太陽の法」こそ、いったん闇の底に沈む地球が新しく拓けてゆくための光なのであるとしている。

我々の住んでいる世界は、多次元宇宙であり、以下のような要素から構成されている。一次元（点の連続）、二次元（縦・横）、三次元（縦・横・高さ）、四次元（縦・横・高さ・時間）、五次元（縦・横・高さ・時間・精神）、六次元（縦・横・高さ・時間・精神・神知識）、七次元（縦・横・高さ・時間・精神・神知識・利他）、八次元（縦・横・高さ・時間・精神・神知識・利他・慈悲）、九次元（縦・横・高さ・時間・精神・神知識・利他・慈悲・宇宙）、十次元（縦・横・高さ・時間・精神・神知識・利他・慈悲・宇宙・創造進化）

九次元宇宙界（太陽界）とは、人霊として、最高度に進化した人々がいる世界である。「救世主の世界」とも言われ、根源的な思想を説き、何千年に一度大きな文明を興すために、地上に出てくるような人たちの住んでいる世界を指している。

八次元如来界（金剛界）は、宗教・思想・科学などの領域で、最高のリーダーだった人々が居住している空間である。その時代の中心となって、歴史を創ってきたような人たちが住んでいる世界をいう。

七次元菩薩界（聖天上界）は、地上にいた時、愛と慈悲に生きた人々が住んでいる世界である。自分のことにわずらうことが少なく、他の人を導いたり、救ったりすることを中心に生きてきた人々がいる。

六次元神界（光明界）は、人類の進化に寄与した、学者・芸術家・宗教家・思想家などの、その道の専門家たちが住んでいる世界である。その上段階には、菩薩に向かって修行中の阿羅漢^{あらかん}や、神としてまつられることがある諸天善人といわれる人が住んでいる。

五次元霊界（精神界・善人界）は、狭義の霊界であり、地上で生きていた

時に、信仰心のあつかったり、善良に生きたりした人々の行く世界である。すなわち、善良な人々の住んでいる所である。

四次元幽界（精霊界）は、人間が死後、まず行くところである。そのなかの暗黒部分を地獄界といい、自分が死んだことに気づき、自らが霊的存在であることを悟った人々の居住している空間を精霊界という。

三次元世界（現象界・物質界）とは、我々が肉体をもって生きているこの地上の世界のことをいい、あの世に対するこの世と呼ばれる世界である。ここでは、意識の発達程度の異なる四次元から九次元までの人々が、平等の立場で生まれ変わっている、修行の場なのである。

人間は、四次元から九次元までのいずれかの住人なのであるが、その魂の修行のために、何度も地上に生まれかわっては修行しているのである。なお、多次元的世界には、縦だけではなく横の世界の広がりもある。まっとうな方向で魂を伸ばしてきた人たちの世界を「表の世界」と言うのに対し、霊的能力のみを通して悟った人々がいる世界を「裏の世界」と言い、仙人界・天狗界などがある。

人霊を超えた世界としては、九次元世界の上に、地球系霊団としては、最高段階である十次元世界がある。そこには、地上に肉体を持った人霊はおらず、三体の意識だけがある。大日意識は、地球生物の積極的な意志・陽性をつかさどり、月意識は、消極的な面、優美な女性的な面を、地球意識は、地球の生命体としての意識、地球上での天地創造をつかさどっている。そこには、もはや人間としての個性はなく、創造・進化に関する役割の違いがあるだけである。

さらに、太陽系としては、十一次元世界があり、太陽という意識体が恒星意識としてある。太陽の生命体そのもの、太陽としての霊体そのものが十一次元存在なのである。

ついで、十二次元世界として銀河意識があり、それは、銀河系宇宙の計画をつかさどっている巨大神霊であり、多くの恒星意識をおさめている。さら

に、銀河意識を超えた、さらに大きな宇宙のなかに、十三次元世界として大宇宙意識があり、その上には、十四次元世界もある。

天国と地獄は、目に見えない世界のどこかにあるのではなく、三次元世界に共存しているのである。天国と地獄をわけるものは、霊的自覚であり、天国は、四次元の幽界から高次元にまでおよんでいる。これに対し、地獄界は、四次元によども、かげの部分にすぎない。ルシフェルが、天上界に対して反乱を起こして以来、地獄には神の光がささなくなり、それ以来、光の天使と悪魔や悪霊たちとの抗争が続いている。

生前、マイナスの想念を数多く持って生き、地上を去った人が、悪霊となって地獄に住みつき、地上の人間の悪想念をエネルギー源としている。通常の悪霊は、本来神の子であるから、反省の余地があるが、魔王やサタンとなると、自ら反省できないところまで心が曇っている。人間は、種々の執着の心を持つことにより悪霊に憑依されるので、感謝の心、謙虚な心を持ち、向上心を持って常に努力し続けることが大切である。

仙人界というのは、生前、霊的な力を専門的に究めた人たちが行く世界であり、天狗界というのは、霊的な力を誇示する人たちが行く世界である。これらは、主として六次元神界の裏側にあり、一般の神界人とは会えないように隔離されている。

光の天使、あるいはその卵のことを高級霊という。菩薩から上の光の天使は、プロの指導者であり、神の代わりにこの地上に降りて、世の中をユートピア化していく使命を持っている。高級霊の本質は、認識力の高さであり、幸福な存在であり、地上の人間とのレベルの差はきわめて大きいという。

守護霊・指導霊とは、地上に生きる人間に対し、神がつけてくれる魂の教師のことをいう。守護霊は、本体・分身方式でつくられた六人のグループ（魂の兄弟）のうち、つぎに地上に出る者になる。とくに、地上に出る者の使命が大きく、強くその実現が期待される場合には、その人の最大の関心事を専門とする指導霊をつけることになっている。守護・指導霊に対しては、

日々祈る気持を持ち、自らのあり方を見直すような態度が大切である。

阿羅漢というのは、菩薩へ向けて修行をしている人たちのことであり、六次元神界の上段階にある境地である。人間として、かなり完成してきた段階であり、以下の判定基準がもうけられている。①心の透明感がある。②守護霊の通信を受けられる。③他人の気持ちが手に取るように分かり始める。その状態を二つに分けると、阿羅漢に向かっている状態である阿羅漢向とそれに達した状態である阿羅漢果に分けられる。阿羅漢果に達するのは、百人中四人か五人である。

六次元神界上段階にあって、直接六次元神界の人々を指導している光の天使たちを諸天善神という。多聞天・毘沙門天・大黒天などがおり、如来や菩薩が地上で法を説く時に、助けたり、守ったりする。

七次元の光の天使である利他行の実践者のことを菩薩といい、人々を救おうという気持ちになっている魂の段階の者をさす。その愛は、「許す愛」の段階であり、七・八百年に一度、この地上に降りてくる。

梵天とは、菩薩界と如来界の間にある霊域（梵天界）に達した魂のことをいう。霊格的には如来であるが、役割上菩薩として、八次元と七次元の橋渡しをする。

八次元の光の大指導霊を如来といい、キリスト教においては、大天使と呼ばれている。独自の思想でもって、文明・文化を創り出すオリジナリティーを持っていて、神の代理人たる存在である。その愛は、「存在の愛」と呼ばれ、または「慈悲」とも呼ばれる。如来の転生輪廻のサイクルは、千年から二千年に一回となっている。

太陽界という言葉には二つの意味があり、広義には九次元宇宙界の全体を、狭義には八次元如来の最上段階をさす。この狭義の太陽界には、ミカエルらの七大天使、ソクラテス、プラトン、老子、墨子、天之御中主之神などがいる。

九次元神霊のことを、救世主（メシア）といい、仏陀・大如来とも呼ばれ

る。地球系霊団には、以下の十名の救世主がいる。エル・カンターレ（釈尊）、アガチャー（イエス）、モーゼ、孔子、アール・エル・ランティ、マヌ、マイトレーヤー、クートフミー（ニュートン）、ゼウス、ゾロアスター

九次元宇宙界においては、太陽系以外の他の星団の霊系団ともつながっており、何千年に一回地上に生まれて根源的な思想を説き、新たな文明を興すのが救世主の使命である。その愛は、神の化身としての愛であり、全世界の人々を救わないではおられない熱意そのものである。

九次元の悟りは、「宇宙即我」であり、以下の三つの条件を満たすものである。①どのような人にも対機説法ができるような、縦横無尽な法を悟っていること。②創世記についての悟り、すなわち宇宙の成り立ち、地球の歴史についても悟っていること。③四次元以降の、多次元世界の法則について悟っていること。

さらに、六大神通力のそれぞれに、最高の能力を有し、三世を見通す能力がある。また、九次元霊が三次元に肉体を持つ場合には、人体にとってあまりに巨大すぎるため、その意識体の一部を使って出てくる。そして、肉体を去れば、その魂は、大霊のなかの記憶の一部の領域におさまってしまう。

十次元から降りて来た神の光は、九次元で黄（黄金）・白・赤・紫・青・緑・銀の七色にプリズム化される。これを、神の七色光線といい、それぞれの光線が、異なる属性を表現している。それぞれの光源には、九次元大如来がいて、それぞれの光線をつかさどっている。この七色の光は、さらに八次元以降で、多数の光に分光されていく。

黄金または黄色の光線は、法・悟り・慈悲の光線であり、ゴードマ・ブッダが担当している。ブッダ意識とヘルメス意識は、ひとつの生命体の一部であり、ヘルメス意識は芸術などの感性的な部分、ブッダ意識は、知・悟り・哲学的部分を受け持っている。

白色光線は、イエス・キリストが担当しており、愛の光線である。また、医療系団の霊団もこのなかに含まれる。

赤色光線の頂点には、モーゼがいる。この色は、リーダーシップを意味し、その系列には、政治的指導者、軍事的英雄らがいる。また、奇跡の光線でもある。

紫は孔子の光線であり、秩序・礼節・学問的考え方などをつかさどっている。神への畏敬の念、崇拜の念を教え、神とは何かを人々に感じさせもする。

青色光線の長は、ゼウスである。青色は、思想・哲学などをつかさどる。文芸・美術・思想を担当するゼウス以外に、マヌがおり、人種問題、思想・信条の統合という役割を持っている。

緑色は、大自然・環境・調和の色で、大調和を重視する光線であり、その下流には、芸術系統がある。マヌとゾロアスターがつかさどっている。

銀色は、科学の光線で、物理・医学・数学・化学などが含まれ、ニュートンが担当している。地上界の利便性を高め、魂修行の効率をも高めている。

エル・ランティは、七色のプリズムの調整役として、各光線の配合を取り決めながら、いかなる文明・文化を招来するかを決定している。マイトレーヤーは、その補佐役として、七色の光を調整しており、さらにゾロアスターが、それぞれの時代の善悪の価値概念を調整する役を担っている。

それぞれの魂は、七色のいずれかを魂の起源として持っており、主としてその光線のなかで、魂修行をしている。それゆえ、その光線の特色が、その人の魂の傾向性に大きな影響を与えている。

人間は、偶然に生まれてくるのではなく、永遠の生命を持ち、時代を越え、国を越えて転生しながら己の魂を磨くのが人生の目的であり、仏国土・ユートピアの建設がその使命なのである。

人生は一冊の問題集であり、自力で解いて初めて実力がつく。その際には、自助努力の姿勢が基本とならねばならず、幸福の科学で出している神理の書籍を参考として、過去生きていた光の天使たちや偉人たちの人生を模範として学ぶという態度が必要である。

この世を、光と闇、善と悪との対立したものとみる考え方を善悪二元論と

いい、本来闇はなく、光のみ実在であるという考え方を光一元論という。この両者は、対立する概念ではなく、段階の違いであるといえる。善悪二元のなかで反省行をし、次なる考え方として光一元論をとっていくのがよく、二つの考えを時間の流れという概念でつないで考えることが大事である。

中道とは、左右の両極端を去り、大調和を生み出す無限の発展の道である。自と他をともに生かす道が中道であり、バランス感覚を大事にしながら向上を目指していくことが大切である。中道の生活に入るためのモノサンが八正道と愛の発展段階説であり、自己反省と自己観照をすることが大切である。

霊とは、姿形なき知性あるエネルギー体であり、神の生命がわかれて個性化したものをさす。このうち、三次元の物質世界に降りて、具体的生命体として地上生活の経験をしているもの、あるいはしたことがあるものを魂と呼ぶ。人間的属性は、意識→霊→魂の順に強くなる。魂には、創造的機能と神の光の集中・発散中枢機能がある。

心とは、魂をコントロールするための中枢部分であり、最重要の意志決定部分である。それは、玉ネギ型の多重構造になっており、外側が表面意識で、その奥に想念帯という一種の膜をはさんで潜在意識と呼ばれる部分がある。想念帯とは、心のなかにある一種の記憶テープであり、その曇りを取り除かないと、本来の自己を取り戻すことができない。

人間そのものが、神の意識体の一部であり、ひとつの完結した小宇宙でもある。人間は神の子であるのだから、みなダイヤモンドとしてつくられている。その原石をいかに磨き、光らせるかということが各自の課題として与えられている。

悪霊の影響など、悪しき現象の原因は、すべて自分の心の内にある。それらとの対決は、己心の魔との闘いである。そのためには、執着を断ち、平凡のなかに光を放つ生き方が大切である。小さな悟りで満足し、自惚れる増上慢を最も警戒しなければならない。

素直さ・自助努力・謙虚さは、神理探究の入口となる姿勢であり、八正道

は、中道に入るための方法であると同時に、心の曇りを晴らしてゆく反省の方法でもある。真実なる心をもって、自らの思いと行ないをふり返ってみるのが八正道の出発点である。それは、人間完成への道であり、悟りへの具体的な方法でもある。

不退転とは、どんなことがあっても決して退かず、神理の道で生きてゆくという境地であり、菩薩への第一歩でもある。これに対し、不動心とは、大きな苦難・困難に際しても動じない強固な心のことをいう。

利自即利他は、自分が悟りによって得た幸福感を、他の人々に還元していく、自分の幸福を他の人々の幸福につなげていくという考え方である。六波羅密多は、この利自即利他の教え、自分を高め、他人との人間関係の向上を目指す教えである。それは、八正道の思いがどのような行動に出るかを説明したもの、すなわち八正道を実践部門に展開したものである。

霊道を開くとは、心の窓が開いて、潜在意識層の守護・指導霊との交信が可能となることである。このような現象が出てくるのは、阿羅漢の境地からであり、その結果の維持がひじょうに難しい。霊道を開いた後は、聖人になる道と精神病者になる道との二つの道しかないという。そのため漏尽通力が大切となってくる。

漏尽通力とは、高度な霊能力を持ちながら、常識人として最高度の力を発揮できる能力のことである。このような力を持った偉大なる常識人の多数輩出が、今後必要とされるが、そのためには高次の認識力を持つことが不可欠である。観自在力とは、神と同じように、すべてのものの本質を見抜き、あらゆるものごとを見通してゆく力である。観自在力とは、外へ向かって遠心的に働く力であり、漏尽通力とは、求心的力である。

如心とは、心の全体像が手に取るようにわかってくる悟りの段階をいう。ある種の一即多・多即一の現われであり、自己意識を本体・分身のごとく分散させることができる境地である。七次元・八次元を中心として、人間の心とは何かということ、中核として勉強している領域のことをいう。

悟りとは、自分の本質を知り、世界の本質を知り、人生の目的と使命を知ることである。悟りを得るということは、人間にとって最大の幸福であり、その根本の原理は、「進歩の原理」と「調和の原理」の二つにわけられる。悟りの効果としては、①認識力の拡大、②影響力の増大、③幸福感の享受があげられる。悟りの要諦は、その維持にあり、向上基準としては、以下の三つがある。①自分自身の真実の姿が見える。②他人の姿を同胞の目で見られる。③人生と世界の存在の意味を理解しうる。悟りが進むほど、人格が向上し、認識力は高まり、霊格もまた向上する。

正しき心の探究は、幸福の科学の全体目標である。それは、自己変革への意欲とエネルギーを意味し、自分の心をコントロールすることでもある。

幸福の科学においては、「幸福の原理」としての四つの道、「愛」「知」「反省」「発展」を現代の「四正道」と呼んでいる。幸福の原理の出発点は愛の原理である。発展とは、愛が拡大して自己展開していく姿のことである。その過程において、純粹さを失ったり、方向をまちがえたりしないために、知と反省がある。

愛の発展段階説によると、四次元的「本能の愛」のあと、五次元的「愛する愛」、六次的「生かす愛」、七次的「許す愛」、八次的「存在の愛」があり、最後に「神の愛」がある。

知の発展段階説は、知的修行における悟りの発展段階説でもある。知の第一段階—知の目覚めは、日常性から脱出して、非日常的なるものを発見する悦びを持つことによりその第一歩がしるされる。知の第二段階—不動の知の確立は、内なる蓄積への自信が、人格的安定となって現われてくる時期である。知の第三段階—知の生産性は、知が個人を離れ、高次なるものに奉仕する段階である。知の第四段階—根源的思想は、如来の段階における知である。これらを通じて、神に向かって自らの人格を高め、悟りを求めていくことが大切である。

反省とは、自分の心の垢を落とし、本来の自己を取り戻す行為のことをいう。反省をするためには、まず神理を知る必要がある。反省の基準は、神の心と己の心の距離を知ることから始まる。反省の本当の目的は、より積極的な自己を展開し、神の心を成就していくことである。反省の関門をくぐることなくして、悟りはありません、それは、まちがいの多い人間に与えられた神の慈悲である。

幸福の科学でよく行なう瞑想とは、三次元的世界の波動を遮断して、実在界と交流を開始する方法のことである。その本当の意義は、実在界から神の光の供給を受けることであり、自分の守護、指導霊の導きを受けることにある。すなわち、この世的なるものを遮断して、そのなかで自分の心の可能性を探ることなのである。瞑想には以下の三つの種類がある。①無念無想型の瞑想—瞑想の初歩の段階で、雑念を払い、心の波長を整えて、安らぎの感覚を享受する瞑想、②目的性を持った瞑想—「光の瞑想」、「幸せの瞑想」、「自己実現瞑想」というような、一定の目的性を持った瞑想、③幽体離脱型の瞑想—実在界との直接的な交流体験。なお、瞑想には、以下の三つの心構えが必要とされる。①神仏の存在を信じる。②愛他のための瞑想である。③実在界の視点を持つ。

祈りとは、神あるいは高級霊へ、積極的に架け橋を架けようとする行為のことである。神に祈るということは、自分を変えてゆくという神への誓ともいえる。祈りの前提として、心清くあることが求められる。神の理想に近づいてゆくための手足となれるように、高級霊の導きを願う祈りが正しい祈りである。祈りという行為は、大いなる愛の実現のためである。

光明思想とは、人生の明るい面、積極的な面を強調してみようという考え方である。反省だけでは足りない部分を補うものがこの光明思想である。それは、自分のまわりに理想的な環境をどんどん展開していくという理論なのである。

常勝思考とは、あらゆるものから教訓を学び、魂の糧とすることによって、

真に人生に勝利していくという考え方である。その基礎にあるのは、転んでもただでは起きないという光明転回の考え方である。そして、成功、失敗にかかわらず、常にそのなかで自らの人格を磨いてゆき、雪ダルマ型人生観が現出してくる。常勝思考の考え方は、反省から発展をつなぐ理論である。いろいろな試練にあうことがあっても、それを自らの魂の筋肉へと変えていく思考である。

幸福の科学では、悟りとそれに付随する喜びを、人間の魂が味わうことのできる最大の幸福としている。それは、この世とあの世を貫く幸福である。その幸福の原点は、与える愛の実践である。私的幸福から公的幸福へという順序こそ、まちがいのない人間としての生き方である。

ユートピアとは、個人としても幸福で、社会全体としても幸福という世界のことである。個人の心の中の次は、家庭ユートピアが創られ、社会のユートピアへと発展していくという。

幸福の科学では、会の目的として、神理の「探究・学習・伝道」という三つの項目をあげ、かつこの順序で行なっていくことを基本前提としている。神理の探究は、関心を持ち問題意識を持って、情報を収集していく、知識を集め将来のために蓄えていくということであり、その前提として確固とした信仰心が必要である。学習というのは、蓄積した神理知識を自分のものとして消化し、いつでも使えるような状況に変えていくということである。伝道とは、自分が学んだその神理を、いったいどういうふうに役立てたか、使ったかという問題である。

神理の学習は即伝道であり、伝道は即学習である。真に知るということは、必ずや行動につながっていくものである。そして、伝道している時には、自分の内に蓄積をし、充電をするという考え方を忘れてはならない。

他の人に神理の話をする場合には、その人の悟りのレベルや理解力、時期に応じて、わかりやすくかみくだき、その人に合った話をする必要がある。これを対機説法というが、その根底にあるべきものは、①自己信頼②

認識力③優しさである。

以上のように、幸福の科学の教義は、規模壮大なものであるが、千冊の神理の書を出すという大川の予告によるならば、その全貌はまだ明らかにされていず、今後も研究が継続される必要があるといえよう。

4. 幸福の科学の組織と活動

幸福の科学の「七つの幸福化宣言」は、以下のような内容である¹²⁾。第一の宣言（神理の探究）われらは人類幸福化のために、徹底的に神理の探究をすることを目標とする。第二の宣言（神理の学習）われらは人類幸福化のために、徹底的に神理の学習をすることをここに誓う。第三の宣言（神理の伝道）われらは神理の伝道のために、全精力を費やすことをここに誓う。第四の宣言（愛の実現）われらは大いなる愛を発見し、その愛の実現のために日々生きることをここに誓う。第五の宣言（幸福の創造）われらは現時代の人びとのみならず、後世の人びとの幸福をも創り出すための具体的実践活動を行なう。第六の宣言（人類の発展）われらは人類の発展をもって、われらの大いなる目標とする。第七の宣言（ユートピア建設）われらの最終の課題は、この地上をユートピアにすることであり、また、四次元以降の霊天上界をもユートピアと変えることである。すなわち、神の創りたるすべての世界をユートピア世界とすることである。

このように、幸福の科学は、「正しき心の探究」を標榜し、人類幸福化運動の基盤とならんとする宗教団体である。活動原理としては、「神理の探究・学習・伝道」の三項目を掲げ、具体的な活動内容としては、書籍、テープ、月刊誌等の発行、並びに講演会、各種セミナー、研修会の開催などを行なっている。

12) 当章の以下の論述は、主として、幸福の科学総合本部編のパンフレット『幸福の科学』1990年、幸福の科学総合本部『幸福の科学10』1990年、3周年記念誌編集委員会編『前掲書』による。

活動の根本理念は、「人生の大学院」とも呼んでいるように、神理の学習団体、生涯教育センターとしての活動にあるという。神理の学習、実践を通して、人間が幸福に至るための方法論、古来「悟り」と呼ばれていたものに至るための科学的方法を教えている。そこにおいて、本当の意味での万教帰一、万教同根を実証せんとしている。つまり、人類の歴史におけるすべての文明の遺産、諸学、諸思想、諸宗派を、幸福という理念のもとに再統合し、宗教改革をはじめとして、あらゆる分野の改革、再生を完成させ、地上ユートピアを実現し、新文明を創出することが、幸福の科学の使命であるという。

当会の会員制度には、正会員・誌友会員の二種類がある。正会員の場合は、幸福の科学の既刊書等を最低10冊読み、当会の審査を受けることが義務づけられている。入会の目的、入会後の抱負、宗教歴等を含む諸項目を記した入会願書を本部へ送付すると、審査結果（a. 合格 b. 待機(三カ月・六カ月) c. 不合格）が送付されてくる。合格者は、正会員の入学金3500円、月会費2000円（三カ月、半年、年極の一括）を振込むと、幸福の科学の正会員として登録される。その特典としては、以下の事項があげられる。一、毎月、月刊誌「幸福の科学」が送られる。一、一切の行事参加資格が得られる。一、セミナー、研修会の受験資格が得られる。一、幸福の科学の最新情報が得られる。一、入会時に「正心法語」が進呈される。なお、平成2年4月より、正会員推薦入会制度が開始された。

誌友会員の場合は、誌友会員申込用紙に記入し、本部に送付すると、振込用紙が送付されるので、入会金2000円、月会費1200円（半年、年極の一括）を振込むと、誌友会員として登録される。その特典としては、以下の事項があげられる。一、毎月、月刊誌「幸福の科学」が送られる。一、一部を除く行事参加資格が得られる。一、幸福の科学の最新情報が得られる。

なお、幸福の科学入会の心得として以下のことがあげられている。一、本会の目的、本会の目的は、人間としての幸福、すなわち公的幸福と、社会全体の幸福、すなわち公的幸福の両者を、あらゆる角度から探究し、恒久ユ-

トピアの建設を目指すこととする。二、本会の研究対象、本会の研究対象は、宗教・哲学・政治・経済・心理・医療・健康・芸術・歴史・文学・国際問題・科学・教育など、一切の学問領域を超えた領野であり、人間精神の向上と発展を課題の中心とする。三、会員の資格、会員の資格は、自らの「正しき心」を日々探究する意欲を有する者とし、入会、脱会は自由、他の宗教、他の団体に属するものであっても、探究心と向上心の有る者は、本会に学ぶことができる。

なお、平成2年10月12日現在の会員数は、正会員、13371人、誌友会員57435人、計70806人である。

幸福の科学の活動のなかで、講演会に言及すると、大川主宰先生大講演会は、当会の最も重要で中心的な行事とされている。第一回目の講演会時には400名であったのが、平成元年12月、両国国技館においては、8500名となった。平成2年においては、全国で年間15回開催され、幕張メッセ国際展示場においては、15000名を越す参加者がみられた。この講演は、会員の他にも、一般の人をも対象としている。さらに、当会においては、善川顧問先生講演会も年数回行なわれて、多くの人を集めている。

幸福の科学では、年二回のサイクルで、初級・中級・上級の資格セミナープログラムを実施している。その趣旨は、講師等をはじめとする人材の発掘・育成にあり、受験対象は正会員である。このセミナーで、一定の実力（神理知識十人格）を認められることが、講師登用のための大きな条件となっている。

セミナーの内容としては、当会の書籍3～4冊をテキストとした講義を聴講した後、自宅で終了認定試験（客観式50問程度＋論述式）に取り組み、採点してもらおうというふうになっている。初級～中級～上級と受験を重ねていくためには、前段階のセミナーに合格していなければならない。参加方法には、受講受験と通信受験とがあり、受講のみも可である。

なお、年一回、全国统一神理学検定試験があり、マークシート方式の客観

式問題百問に90分で回答するというものである。90点以上の者に実施される二次試験（記述式）に合格すると、正会員の場合は、上級セミナー終了認定試験合格と同等の資格が付与される。さらに、誌友会員で、平均点以上得点した者は、本人の希望により正会員合格とされる。

合宿形式で行なわれる研修会は、幸福の科学で最も質の高い学習の機会であるという。3～4日間にわたり、講義ならびに質疑応答、グループディスカッション等が行なわれ、研修テーマが深く掘り下げられる。親睦の場ともなる研修会に参加するためには、事前に行なわれる参加資格認定試験による選択があり、終了認定試験、講師登用を目前にした講師補の論文スピーチ審査も行なわれていた。しかし、現在では、より簡略化された形式の研修も行なわれている。

幸福の科学では、さまざまな特別セミナーを随時実施している。会員向けの修法セミナーとして、「心と瞑想セミナー」「反省法セミナー」などが、週一回（全四～五回）のペースで行なわれており、内容は前半が講話、後半が反省や瞑想などの修法指導となっている。

以上の外にも、ウィークデーセミナーとして、本部講師等によるさまざまな企画がなされており、平日の昼間や夜の時間帯を使って行なわれている。さらに、各種支部講習会が全国において実施されており、その内容は、バラエティーに富んでいる。

幸福の科学では、現在以下の20の本支部がある。本支部名（関東本部・関東統括支部・東京統括支部）、支部名（北海道支部・太平洋支部・日本海支部・千葉支部・神奈川支部・埼玉支部・東京東部支部・東京北部支部・東京西部支部・東京南部支部・北陸支部・中部支部・関西支部・中国支部・四国支部・九州支部・沖縄支部）

これらの支部では、活発な支部活動を行なっている。とくに、分科会活動は盛んで、壮年部（50歳以上の男女）、婦人部（50歳未満の女性）、中堅部（35歳から49歳までの男性）、青年部（34歳以下の男女）の活動四部がまずあ

げられる。さらに、現代成功研究会、新経済人サークル、政治経済研究グループ、科学者・研究者サークル、医療サークル、教育者サークル、芸術サークル、音楽サークル等の専門活動部分も結成されている。

こうした各種の活動を、家庭や職場に生かし、ユートピアを建設しようという動きは、全国的な広がりをみせ、「光のネットワーク」となって展開されている。それぞれの支部で講演会・講習会・ビデオ上映会等の催しが企画運営されている。

当会の組織は、幸福の科学総合本部一本支部一地区一ブロックグループ一幸せチームとなっている。幸せチームは、地域に根ざした正会員・志友会員の集まりであり、講演会・セミナーなどの連絡や新刊情報、また会員相互のネットワークは、それを通して行なわれる。幸せチームは、チームの運営の責任をもつチーム長、チーム内の連絡をうけ持つ連絡チーフ、神理学習の指導役の支部チューター、その他の正会員ならびに協賛者としての誌友会員から構成されている。

幸福の科学総合本部は、大川隆法主宰、善川三郎顧問、大川きょう子主宰補佐のもとに、七つの部局から構成されている。事務局は、会の中長期計画、大講演会等スケジュールの決定、新規事業企画、情報管理、会員サービス、各局間の調整などを行なっている。事務局には、秘書課もあり、編集部・企画広報課も含まれている。

総務局は、財務・経理・人事・総務・庶務に分かれており、会の財政面、人材面、福利厚生面を担当している。さらに、各支部の経理も統轄している。

研修局は、具体的なトレーニング部門を担当している。一般会員向けの企画としては、資格セミナー、研究会の試験関連業務、全国統一神理学検定試験の実施、各種通信添削講座などを行なっている。さらに、講師養成のための、さまざまなカリキュラムを設定・実施している。

指導局では、大川主宰の説いている膨大な神理を体系化し、編纂することを目的としている。ついで、当会が推進する人生の大学院構想の達成を使命

とし、神理の指導・学習方法の確立を通してユートピア建設の推進力となることを目指している。その一環として、さまざまな分野とレベルの人々に、神理を学びやすい形で提供するためのシステム開発とテキストづくりを行なっている。

国際局は、神理の海外伝道のための組織業務機関である。海外伝道としての書籍の発行、販促活動、また、海外会員への活動指示、学習指導などが中心的な業務内容であり、そのサービスは、ボランティアグループによって支えられている。

活動推進局は、「ユートピア建設への活動」を「推進」する役目を担っている。その活動のひとつは、行事の企画・運営であり、もうひとつは、全国にある支部・地区活動の活性化である。具体的には、大川主宰の大講演会、善川顧問の講演会、反省・瞑想セミナーなどの企画運営、支部・地区に集う全国の会員の伝道活動を方向付けし、支援することを行なっている。

事務局編集部は、大川主宰、善川顧問の説く神理を、書籍・小冊子・カセットテープにしていくという役割を担当している。それ以外にも、月刊誌の編集、伝道ツールや広告等のデザイン制作も行なっている。

出版局（幸福の科学出版株式会社）の具体的な業務は以下の如くである。
(一)いつ、どのような書籍やテープが発刊されるかの確認を行なうこと。
(二)この確認にもとづき、印刷、製作等を行なうこと。
(三)これらの光の珠を普及させるために営業計画を立案し、SPMの協力を得て書店への普及活動を行なうこと。
(四)より多くの読者を獲得するための積極的な広告宣伝を、新聞や雑誌その他のメディアを通じて行なうこと。なお、SPMとは、スペシャルプロモーションメンバーの略であり、会員のなかのボランティアによって構成されている。彼らは、組織内に、「新規開拓班」「常備店管理班」「欠本補充班」「ディスプレイ工作班」などをつくったりして、神理の書の販売普及に努力しており、現在約2600名いるという。

会員の男女比は、男6に対し女4程度であり、平成2年4月27日現在の平

均年齢は、正会員39.2歳、誌友会員42.3歳である。スタッフの半数は、東大・京大・早稲田・慶応等の大学の出身者であり、会員レベルでもインテリ層の比率は、新宗教のなかでは高いといえることができる。当教団は、知的要素の強い教団として位置づけられる。

5. むすびに代えて

大川隆法は、講演の際、多くの指導霊の霊指導を受けると共に、霊界を探訪したり、他人に霊を出し入れしたりもする。したがって、大川は、高橋信次や出口王仁三郎と同様に、脱魂（魂の旅）と憑霊（霊の憑依）の双方を兼備し、そのうえ審神者^{きにわか}でもある霊能者として位置づけられる。

さらに、ウェーバーの預言者の分類においては、同じく「再誕の仏陀」とされながら、真如宛の教祖、伊藤真乗以上に、「宗教革新者」より、「宗教創始者」に近いといえることができる。

大川は、一億五千万年ぶりに肉化した、エル・カンターレの本体であるとされる。大川は、ラ・ムー、トス、リエント・アール・クラウド、ヘルメス、ゴードマ・ブッダらと関連した生命体の転生した存在とされるが、本体以外の存在とは異なり、より大きな使命を課せられているという。

今から五百年前、予言者ノストラダムスは、「東の国にて『太陽の法』が説かれる時、自分の恐怖の終末予言はその使命をおわり、新しい時代が始まる」と述べたというが、この『太陽の法』を説く救世の預言者こそ大川だといっているのである¹³⁾。つまり、大川によって行なわれる日本を中心とする大救世事業によって、人類は1999年の滅亡の危機から救われるのであり、そのためにも幸福の科学がより大きな勢力を有する必要があるという。

幸福の科学の教義をみると、仏教・キリスト教・スピリチュアリズム・神智学・光明思想等の影響が強い。日本人では、谷口雅春と高橋信次、とくに高橋信次の影響を強く受けている。この点に関し、大川は、高橋の今世の使

13) 大川隆法『太陽の法』角川文庫、1990年、3頁。

命は、「法の全体を説くことではなく、エル・ランティという神霊の存在を地上の人に告げ、谷口雅春・高橋信次に続く、第三弾として出てくる私、大川隆法を通じて、霊界通信によって、神理を悟ることにあつた」¹⁴⁾とする。そして、さらに大川は、「私は、人間・高橋信次の遺した心の教えを土台として、さらに、これから50年近い年月の間、正法神理を説いてゆこうと思っております。」¹⁵⁾と述べている。

大川は、釈迦より偉大な存在であるから、当然釈迦の有した六神通力を持っているとされ、講演中の彼を霊視すると金色の仏に見えることも多いという。それ以外にも、大川が有している超能力に関しては多くの事が語られている。しかし、その一方では、大川は高橋信次ほど霊能力を誇示することはせず、法を説くことにそのエネルギーを費やしているとされる。

したがって、霊道を開く行為もほとんど行なわず、会員も「偉大なる常識人」となることが目標とされる。しかし、伝道活動は現在きわめて重視され、教団は急速な教勢の拡大を目指している。これらの点からも、大川隆法ならびに幸福の科学は、今後も注目すべき存在であるということができよう。

14) 大川隆法『黄金の法』土屋書店、1989年、211～212頁。

15) 『同書』212頁。

A Study of The Institute for Research in Human Happiness

Kenya Numata

The Institute for Research in Human Happiness is a society of people researching the principles of human happiness. From the “private happiness” of each individual to the “public happiness” of the whole society and the whole world—this serve as a slogan for those gathered at the Institute. They hold that there are four principles of happiness: “love”, “knowledge”, “reflection” and “development”. They have established a clear over-view of the universe. The world we are living in is not simply divided into the physical world and the spiritual world, but is involved in a multi-dimensional and high-dimensional universe. They are determined to initiate a salvation project throughout the world with Japan as its center.